

の人々が忙しく働いている様子を見て、なんと活気に満ちているのだらうと思った。しかし、上斎原村はこのような活気をみせ、山奥の村にしては公共施設が整っているにも関わらず、過疎地域に指定されていたのである。ここにおいて、私の「過疎」に対するイメージは完全に覆され、一体「過疎」とは何かという疑問が湧いてきたのである。そこで、上斎原村が過疎問題をどのように受けとめ、そして、地域の特性を生かしながら過疎に対してどのような対策をたててきたのか、さらに、将来性をもった対策としてはどのようなものがあるのかを考察してみた。

一口に言えば、上斎原村の人口変化は、高度経済成長の影響よりも、人形峠のウラン鉱山の事業所の存在に大きく左右されてきた。1955～1960年にかけての人口増加、1965～1970年にかけての23.9%という人口減少も、事業所の影響によるものである。1970年以後の調査でも人口減少を続け、林業、畜産などの地域産業の充実が図られており、何十年か先には、大きな発展がみられるであろうと予想されている。そして、ここ数年来、人口は安定しており、わずかの増加もみられる。この人口の安定は観光開発、人形峠原子力産業株式会社の設立によるものである。村民の自主的な開発から始まったスキー場開発は、当村が奥津観光レクリエーション地区に指定され、県の補助を受けて恩原スキー場が開発されたことで、その頂点に達し、過疎防止の大きな要因となってきた。しかし、昔からのスキー場は設備が不十分ということで衰退の傾向にある。また、スキー場は年々の気候条件に左右されることが多い。このようなことから、観光産業の不安定性が指摘できる。

これに比べ、「人形峠」という上斎原村の特色の上に設立された原子力産業株式会社は経営の安定性からみて、今後の過疎の歯止めとなることが予想される。実際、この会社の設立にあたって都会からのUターン者を多数迎えることができた。

上斎原村は過疎防止に成功してきた村であるといえるが、スキー場の開発及び「人形峠」という上斎原村ならではの特色が成功の大きな要因となっているといえる。地域産業を発展させることも、長い目でみれば大いに必要なことであるが、過疎を早急に防ぐには、その他の対策も必要である。地域の特色を最大限に生かして過疎対策をたてることができた上斎原村は幸運であったといえる。

三宅島の自然環境における植林の意義

山 田 真 紀 子

(1)研究の目的

活火山島という特殊な自然環境において、低い土壌の生産性を高める上で、三宅島では植林の果たす役割が大きいと考えた。そこで島内のある地域を選んで、実際に植林が年代的に新しい火山砂礫堆積物に及ばず影響について、土壌学的方法で分析し、明らかにした上で、三宅島における植林の意義について考察しようとした。

(2)研究の枠組

まず、文献調査で三宅島の概観をとらえたのち、自然環境について詳しく調べ、さらに現地聞き取り、資料によって三宅島の土地利用状況を、伊豆諸島の中の大島・八丈島と比較し、三宅島の植林につい

てみていった。つぎに、今から約100年前の明治7年の噴火の際に堆積したスコリアの一角を調査区域とし、ここにおけるクロマツの植林地帯と、非植林地帯である自然裸地の表土を比較し、植林によってスコリアの風化が促進されているかどうか、分析実験を行なって調べた。

(3)研究の結果

三宅島は、伊豆諸島の他の島々と同様に、温暖多雨の恵まれた気候条件下にあるが、典型的な成層火山の円錐形を呈し、耕作に適した平坦地が少ない。また全島が、比較的新しい熔岩や火山礫に厚く覆われているためにやせ地が多く、ハンノキ林による切替畑を余儀なくされている。三宅島は、この切替畑のハンノキ林を含めると、植林面積は全島の半分近くを占め、針葉樹の造林面積は伊豆七島一である。三宅島で植林がさかんである理由としては、まず、切替畑経営が森林経営と一体となって、植林を促進していったことがあげられる。第2に、たび重なる噴火で原生林を失い、被害地を早く緑地化しようとする意識が島民にあったためと考えられる。

約100前の噴火によって堆積したスコリア地帯の土壌を分析したところ、植林と非植林地帯とでは、前者のスコリア層の方が後者のよりも風化が進んでいることがわかった。両者の差は、時間が経過するにつれて開くと予想され、この一角のクロマツには用材としての利用の他に、重要な働きがあるといえる。

三宅島の林業は現在不振が続き、造林計画も中断されているが、三宅島の植林は、単なる産業上の利益のみならず、防風・防潮林としての働きはもちろんのこと、耕地の地力回復、噴火被害地の緑地化、風化促進といった多面的機能を持ち、三宅島の自然環境において植林のもつ意味を絶えず認識する必要がある。